Art in Hospital

武蔵野の森が見守る「平穏と安静」

⑨③国立精神・神経医療研究センター病院（東京都小平市）

診療棟は2010年竣工。国立精神・神経医療研究センターは病院の他に神経研究所や精神保健研究所などから成る

〈病院と研究所が一体となり精神疾患、神経疾患、筋疾患及び発達障害の克服を目指した研究開発を行い、その成果をもとに高度先駆的医療を提供するとともに、全国への普及を図る〉——国立精神・神経医療研究センターが掲げる理念だ。傷痍軍人武蔵療養所として設立されたのが1940年12月。後進である国立武蔵療養所と同神経センター、国立精神衛生研究所を統合、現在のセンターとして生まれ変わってから27年が経過した。

現在はナショナルセンターの病院として精神科をはじめ、神経内科・小児神経科・脳神経外科・総合外科・総合内科と六つの診療科を擁する。

「3年前に造った新しい病院はバリアフリーで患者さんにとって利用しやすい構造を考えました。精神科の病室は全室個室。精神科の比較的大きな病院で全てが個室というのは、国内で当院が初めてではないでしょうか。居住環境、療養環境としてはベストだと考えます」（有馬邦正副院長）

精神科に絞って話を進める。現代社会で生活していく上でストレスは付きものだ。職種や年齢を問わず、誰もが緊張を強いられることはある。

「ストレスに駆られて療養する。あるいは対応の方法を学ぶ。精神科の患者さんはこうした目的で入院することが多くあります。ただ、入院の期間中にもストレスはある。患者さん同士の付き合いや職員との付き合いの中でいらいらすることもあれば、病気そのもので不安になることもあります。そういう場合、一人になって自分の気持ちを鎮める——カームダウンが大事です」（同前）

他の人からの刺激を避け、自室にこもりカームダウンする。有効な方法だ。だが、精神科医療機関の病室は従来、4～6人の大部屋が主流だった。一方、家庭生活では個室が一般的になっている。

「大部屋だと、緊張がかえって高じる面がありました。家庭とできるだけ似た療養生活が望ましい。そうはいっても、集団でプログラムを受けてもらうこともある。その場合も、調子が悪くなったら、自室に戻ってカームダウンできる。そうした環境を保障するには個室しかない」（同前）

新病院の屋上は庭園となっている。患者や家族にとっては格好の憩いの場でもある。快晴の日には遠く都心部まで見渡せるほど眺望も利く。

迷わずに目的地にたどり着ける簡素な構造。カフェや食堂も含め、柔らかな印象が人々を包む。

中庭。木々の様子で四季の移ろいを感じ取れる

精神科病室。全室個室を実現（4病棟各35床。合計140床）

診療棟屋上の庭園。患者のリハビリテーションの場でもある

みんなの食堂。健康をテーマに管理栄養士がメニューを監修

ホワイエ。障子を効果的に配置。カフェも設けられくつろげる

東京都心から西へ30km、武蔵野の面影を残す自然に恵まれた環境